

### (3) 横手木綿

横手木綿の歴史は古いようです。

戦後になっても本町の裏通りに入ると、ハタ織りの音が高い塀越しに歌っていたものでしたし、また、前郷でも威勢よくハタ織りの工場音をひびかせていたものでした。少し、さかのぼって大正期の終わり頃、富士見町にも「平福」という名の木綿・染め物の会社があったといえます。こうした織物・染め物を業とする店が、川という条件に恵まれて、横手には多かったようです。前郷にあったハタ織り工場は横山に移り、「伊勢谷紡績」として伝統の音をつむいでいたようですが、今はその音も聞かれなくなってしまいました。

横手木綿が、記録に出てくる初めは『秋田県史』によると次のようです。

仙北郡六郷村の豪商栗林家の《万書留覚帳》によると、  
正徳四年（一七四四）の〔棚改之時分写〕に、  
・久保田地織  
・角間川地織、あるいは  
・横手地そめ（染）  
・横手染むし（無地）  
・横手むし（上物）とか、  
・大森そめ（あさ黄）  
・大森上むし（無地）  
・大森花いろ などがあり、  
これに〈京注文さんとめ木綿類〉とともに店売りされていたことがわかる。

木綿染めでは横手が、まずあげられているのがわかります。木綿そのものはどうかというと次のようです。

六郷村の京野又左衛門が、寛永十八年（一六四一）頃、横手から木綿を仕入れて小売りしている（六郷・京野文書）。

横手木綿と横手地染めともども、早い時期からの横手の産物であったと考えられます。『県史』は続けて、最上家口伝をとりあげます。

横手木綿の起源は、同所最上忠右衛門の口伝によると、(攀郷吏)、平鹿郡樋口村から横手に移住して来た野御扶持衆(のぶごしゅう)が、延宝年中(二七三〇)に、家計補助のため内職として、当時酒屋であった同家の世話によって始めたことによるものであり、これを親類の久米才助(のち河野の改姓)に染めさせて売らせたところ売れ行きが悪くなく、以後、家中工業として漸次発展するに至ったものである。

前述した正徳四年に確認される横手染めは、まさにこのような横手における地織り木綿の生成とその染色にかかわるところが多く、享保頃(二七六〇)と伝えられる久米才助の染屋開業や、元文(二七六一)から寛保(二七六一)・天明(二七九〇)にかけての絞り染めの改良を経て、最上家が酒屋をやめて木綿織りを自ら経営し、染屋をも経営するに至った十八世紀の後半が横手木綿の本格化した時期であろう。

このように『県史』は横手木綿の歴史の概要を記述していますが、元の『横手郷土史』は、口伝をさらにくわしく取り上げています。惜しいことに最上家の口伝のみで、裏付ける古文書資料などほしいのですが、それはそれとして、まずは聞いてみることにします。

最上家は昔は四日町に住し、富裕にして酒造を業として在った。野御扶持衆、延宝年中(二七三〇)樋口村より移転した後(：城詰めお米蔵番として野御扶持町に移住)酒を買いにくる者多くあった。一日その二三人の人来ていうよう、頂戴の御扶持のみでは生活するに甚だ困難であれば、何か我々に適した職業をほしきものである、よい職業もあらば教えられたしという。忠右衛門、旦那方、関東におられた時には何業をなされしかと問うに、多くは機織(はた織)を内職としていたという。忠右衛門しからば織って見給えとて、土崎港から綿一梱買って試みに織らしめたところ、出来栄えよろしい。これを親類の久米(後に河野と改姓す

る)才助に染めさせて商店に売るに、(略)売行悪しくない、故にこの業を大きく営まんと考えた。

なんと目に見えるように語ってくれています。それにしても横手木綿が野御扶持衆とふかくかかわっていたことを知らされます。この人たちは樋口一帯の新田開発に励んだ下級士族とされる人たちの集団でしたが、開田に成功することで城詰めの米蔵番に任用されます。けれども給銀は低かったでしょう、そこから、最上家との対応が始まったとされます。ですから、野御扶持衆の力あつての横手木綿であつたともいえます。

口伝はまだつづきます。

士族町にはこの業に従事する者、年々増加し、数年ならずして各町到る所、機杼の声、紡錘の音を聞かぬ日はなきにいたつた。既にしてこの業漸く町家にも広まり他町村にも及び、文化・文政の頃には年産額二十万反を産し、米沢、南部等まで輸出するに至り、横手木綿の声名大に高まつた。忠右衛門家業は酒造であつたから、木綿の方は専ら分家治助に担当せしめておつたが、その業務繁多となつたので、統一上、経営上自らその衝に当らざるを感じ、酒造業を廃して自ら之が経営に当り、染屋も兼ることとした(現清川町)。天保後、越後より織工五人を招聘し、数十台の大織具を造らしめて之を貸与し、大に之を伝習せしめたから、縞木綿・兜羅綿等をも織出すに至り、横手木綿の声益々高くなつた。忠右衛門の貸織具のみで四百七十台に上つたといへば、その盛大なること知るべきであろう。

横手の内町のあちこちから、ハタ織りの音が聞こえたに違いありません。町うちに貸し織具四百七十台もの音が聞こえたというのですから、町がひとつの木綿工場のひびきを持ったものといつて過言ではないといえましょう。たいへんな盛況ぶりが見えてきます。横手木綿のこうした発展の背景にいくつかの重要なことをみなくてはなりません。ひとつは

藩主義和による国産品奨励・保護政策があったこと、もう一つは、久保田豪商・山中新十郎（増田町出身）による衣料陸路移入禁止の献策があったとされます。こうした時代のなかで「正藍染と紅絞の技巧を加え、（略）領内産白土と蕨粉を型糊とする模様鮮明で染法も容易な形付染めを案出」などの発展を見せていきます。さきの豪商・山中新十郎は「明治六年（八六三）頃、原価綿の安価入手策として、平和街道、現一〇七号線の開通策を考えた。北上線はこの新十郎の案に沿っている」（「秋田大百科事典」）として、「木綿の道」平和街道のむかしを裏付けています。

